

里帰り

岐阜東高校 3年 早野 圭祐

わたしが“彼”と出会ったのはちょうど三年前だった。当時、上京したばかりの彼は、まともな職もなく、所持金は底をつき、道のそばで力尽きようとした。

そんな彼を、わたしは介抱し、マンションで料理をごちそうした。余程お腹がすいていたのか、口いっぱい頬張りながら褒めてくれたのは、今も忘れられない思い出の一つ。やがて、定期的と一緒に食事をとるようになり、気付けば交際を始めていた。

やがて、昨年の春、プロポーズされた。もちろん、その場で受け入れたが、彼の御両親に会おうと催促するものの、なかなか承諾してくれなかった。

そして次の春、医師から妊娠を告げられた。まだ躊躇していた彼に、ガツンと言ってやった。ら、とうとう重い腰を上げてくれた。

こうして今、二人で里帰りをしている。妊娠もあったので、彼に運転を任せ、わたしは助手席でゆらゆらと揺らされながら外の景色を楽しんでいる。

都会生まれ都会育ち、都会暮らしのわたしにとっては、スライドのように次々変わっていく景色に目を輝かせるが、ハンドルを握っている彼は、ただ終わりなき一本の道をにらみながら黙っていた。

気まずい空気の中、麓に彼の実家がある山が見えた。堂々、というよりも悠々としているが、まだ初春なのか、山肌は枯れ木で所々剥けているように見え、思わず吹き出してしまった。

しかし近づいてくと、急に空模様が変わり、恐ろしいものに飲み込まれそうで気が気でいられなかった。

やがて雨が降り始めたころ、一軒の古い家が見え、車は入口前で止まった。白い小さな花が咲き誇る生垣に囲まれた敷地は、驚くほど広く、家主の威厳が感じられた。家はところどころ色あせ、シミもあるがむしろそれがアジとなり、奥ゆかしい古風の和風屋敷をより美し

く飾っている。

まさかこのお宅が彼の実家か、と思つてしまつたが、表札には彼と同じ苗字が掘られていた。
この瞬間を待ちわびていたわたしは、踏み出せず、持つている傘の柄を強く握つてしまう。

四方から沸き起るざわめきや、目の前に広がる大きな屋敷が、あたかも一つの巨大の生き物となつて立ちはだかる。

だが、出かけるまで躊躇していた彼は、導かれるように堂々と歩み、わたしはその背中を追いかけた。

壁につけられた古びたチャームを押すと、透き通るような軽い返事とともに、中から一人のお年寄りの女性が顔を出した。翡翠色の着物を召した彼女は、しっかりとした顔立ちから厳格さがあふれだし、丁寧な物腰は彼女を美しい淑女に仕立てた。都市をまったく感じさせない彼女の風貌に驚いたが、彼女もまた眉をひそめた。

差していた傘も捨て、裾を握りながら小走りで行つてきた老女は、いきなり彼を平手打ちした。高い乾いた音は、すぐに雨音にかき消されたが、二人は黙つたまま睨みつけていた。

「真司、いまさらよく顔を出せたものだね」

最初に沈黙を破つたのは老婆のようだ。続いて、彼も口を開いた。

「お袋、今まで連絡をよこさずすまなかつた。今日は合わせたい人がいるんだ」

どうやらこの老女が彼のお母様のようだ。お母様はこちらを見て、彼はわたしの背中を押した。

「真紀子です。真司君とお付き合ひさせていただけます」

「妊娠してるんだ。この春にわかつたんだ。いきなりですまなかつた」

彼はいきなりとんでもないことを告白した。お母様はさまざま表情を変え、仕舞にもとの堅苦しい顔に戻つた。

「真司、あんたが出て行つたとき、村の人もわたくしも心配していたのよ。なのに、何食わぬ顔をして、いきなり女性を紹介するなんて。おまけに妊娠まで。お父様もこのことを聞いたらきつひ…」

「そうだ、おやじ、おやじはどこにいるんだ」

お母様は依然として、眉一つ動かさなかったが、確かに一筋の涙を流したのだ。そして、弱いかな声で、

「お父様は、あなたたちが来る四日前に、旅立たれたわ」

ついに、強気になっていた彼も、突然の一言に、膝を震わせながら崩れた。まるで赤子のようになわなな震えながら出た言葉は、実の父親への罵倒ではなく、謝罪だった。やがて雨に濡れていく彼に、わたしは何もできなかった。